

# 私が受けてきたものは、構造的暴力

「311子ども甲状腺がん裁判」第15回口頭弁論意見陳述全文 原告8ひとみ

震災が起きた時、私は小学6年生でした。ランドセルを玄関に放り投げて学校に遊びに行き、ブランコに乗っていた時に大きな揺れがきました。原発が爆発したことは、よく覚えていません。ただ、将来自分ががんになって、病院へ行く想像をした一瞬のことは覚えています。いつかがんになって死ぬかもしれない。12歳で、そういうことを、なんとなく受け入れていました。

原発事故後の世の中の急な変化で、感情が麻痺し始めました。目の前が薄く暗くなり、沼の中を歩いているような苦痛な日々でした。でも毎日学校があつて、部活に行き、友達と家に帰る。その繰り返しで、ニュースで語られる「フクシマ」と、自分の生活はかけ離れていました。外国では、福島には人は住めないと言われているらしいけれど、私の目の前には震災すら日常になった、日々がありました。

高校2年生のときに甲状腺がんが見つかって、手術することになりました。どうしてがんになったのか、医師に聞くと、「この大きさになるには10年以上かかるから、原発事故の前にできたもの」と説明されました。私は、「原発事故と関係ない」というその言葉を率直に受け入れました。医師は私を見て「みんなあなたのようにだったらしいのに」と言いました。その当時、「甲状腺がん」という言葉が原発事故と直結していて、この診断を聞いて、普通でいられる人はほぼいないのだと感じました。検査も手術も、異様に軽い雰囲気が進められて、見つかってラッキーだったね。せつかくだし取ってしまおう。とってしまえば大丈夫。そんなノリでした。

手術を終え、大学に進学すると、私は激しい精神症状に苦しめられるようになりました。幻聴、幻覚、錯乱状態、発作。身がちぎれそうな、激しい苦痛が9年続き

## ◆特集 脱原発、福島をわすれない

ました。でも、その時はなぜ、そのような症状が出るのか、わかっていませんでした。でも、大学卒業後に受診した精神科で、震災のPTSDと言われました。

震災や原発事故があっても大丈夫だった。がんになっても大丈夫だった。そう感情を麻痺させてきたツケを払うように、心も体も壊れていきました。裁判のためにカルテを開示すると、1回目の検査の時はがんどころか、結節もありませんでした。わずか2年で、1センチのがんができたのです。しかも、リンパ節転移や静脈侵襲がありました。

「事故前からあった」という医師の発言は嘘でした。この事実を知り、私の精神状態は悪化し、何も手につかず、提訴後、会社を辞めました。

私は9年前、手術の前日の夜、暗い部屋で1人、途方もない不安や恐怖を抱えていました。その時、私の頭に浮かんだのは、「武器になる」という言葉でした。私は当時、「甲状腺がんの子ども」を原発運動に利用する大人に怒っていました。私は、大人たちの都合のいい「かわいそうな子ども」にはならない。なにがあっても

幸せでいよう。そう思いました。不安と恐怖と混乱で、溺れてしまいそうな中、手探り寄せて、掴んだものは、怒りです。尊厳を侵された時、怒りが湧くのだと知りました。それをかすがいに、甲状腺がんへの不安を乗り越えた高校生の時の私と共に、今、私はここに立っています。

でも大人に利用されたくない、強く願っていた私は、気づくと、国や東電に都合のいい存在になっていました。胃がねじきれそうなほど、悔しいです。

私を受けてきたものは構造的暴力です。命より、国や企業の都合を優先する中で、私たちの存在はなかったことにされていると気づきました。私たちは論争の材料でも、統計上の数字でもありません。甲状腺がん、体と人生が傷ついた私たちは、社会から透明にされたまま日々を生きています。私にとって福島で育つということは、国や社会は守ってくれないということを感じることでした。十分すぎるほど諦め、失望しました。でも、私は、抵抗しようと思います。命と人権を守る立場にたった、どうか独立した、正当な判決をお願いします。

(げんこく8 ひとみ)